横浜市立一本松小学校　　３月号

学校だより

令和４年２月２８日
横浜市立一本松小学校
校　長　髙桑　透

「自分に自信をもつ」

校長　髙桑 透

校庭の梅のつぼみも大きくなり、少しずつ春が近づいていることを感じます。今年度も残りひと月となりました。6 年生は卒業して中学校へ、他の学年も進級して新しいスタートを迎えます。感染症対策をしながらの学校生活は、子どもたちにとっても楽しみにしていた行事が中止になったり形をかえたものになったりするなど、がっかりすることも多かったと思います。それでも、学校で友達と一緒に生活すること、勉強することはしっかりと子どもたちの成長につながっています。私たち大人が思うよりも、たくましく、そして今を楽しむ気持ちにあふれているようでした。これからも一日一日を大切にして、各学年のまとめをしっかりして、次のステージに進んでもらいたいです。

先日、北京オリンピックが終わりました。昨夏のオリンピックに続き、いろいろな競技が行われました。日本人選手の活躍も連日報道され、スポーツの素晴らしさを感じる日々でした。私が今回のオリンピックで一番心に残ったのは、カーリングの決勝戦後の「ロコ・ソラーレ」インタビューです。

「ロコ・ソラーレ」は、残念ながら決勝戦で英国に敗れてしまい ２ 位でした。試合中は笑顔を絶やさなかった選手も、試合後のインタビューでは悔し涙を流していました。決勝という金メダルに手が届きそうな場所までいきながらも、勝てなかったことは、私たちが想像する以上に悔しかったのだと思います。そんな中で、チームをリザーブとして支える石崎選手が、「この銀メダルはちゃんと喜んだ方がいい」と言ったことを聞いて、他の選手たちも、少しずつ気持ちが変わり、銀メダルをとったことを喜べるようになったと答えました。そして表彰台には手をつないでジャンプで飛び乗り、満面の笑顔で銀メダルを受け取っていました。選手たちが泣き顔から笑顔になっていく様子をみて、とてもうれしくなりました。きっと、リザーブとしてチームを支えてきた、そしてその努力を知っている石崎選手だからこその言葉だし、選手もその言葉を受け入れることができたのでしょう。本当に素敵な表彰式でした。

オリンピックに出場することは本当に大変な努力を要することです。その素晴らしい選手たちが、これまでも、金メダル以外、またはメダルを逃してしまったときに、申し訳なさそうな表情でインタビューに答えているのを見たときに、自分はいつも悲しい気持ちになっていました。力いっぱい戦った自分をほめて、認めて、そしてオリンピック出場を楽しかった思い出として心に刻んでほしいと思います。

人は誰でも自分自身に自信がもてなかったり、がんばっても結果が出ないと落ち込んだり、他人と比べてがっかりすることがたくさんあります。そんなときに、ちょっと立ち止まって、自分を見つめてみましょう。自分に自信を持つための第一歩は、自分の成長に気付けることです。他人と比べずに、過去の自分と比べてみましょう。年度末の3月は、子どもたちが自分に自信をもつことができるように、少しの成長、少しの変化を見逃さずにたくさんほめる一か月にしていきます。

令和3年度も、「チーム一本松」として、子どもたちの健やかな成長を支えていただきありがとうございました。引き続き、子どもたちのためにご理解ご協力をお願いいたします。